旧約聖書の中の祈り

□「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの３つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□「旧約聖書の中の祈り」の学びの進め方とその目的

旧約聖書の中には、全部で48の祈りがあります。これらの祈りをひとつひとつ学んでいって、祈りについてのいくつかの結論を導きたいと思います。その結論を先に言うと、次のとおりです。

1. 旧約聖書の中の祈りの大半は、とりなしの祈りである
2. 祈りは、しばしば、嘆願である
   神に何かを求める。たとえば、エリシャは、自分のしもべに天使たちの軍勢を見させてほしい、と神に願った。ヨナは、いったんは拒んで逃げてしまった使命を再び帯びて遣わされるようにと祈った。ヒゼキヤは重病の中で自分の命が助かるように祈った。ネヘミヤは周辺からの激しい脅しから守られるように祈った。
3. いくつかの祈りは、神に感謝をささげる、あるいは神をほめたたえる歌である
   そのような祈りをしたのは、たとえば、ハンナ、ダビデ、そしてハバクク
4. いくつかの祈りは、特別な状況の中で神のみこころを尋ねる祈りである
5. 祈りは、時として、神の約束に基づいてなされる
   モーセ、ソロモン、そしてダニエルは、それぞれ、それまでに神から与えられていた約束に基づいて祈った。彼らは、神が約束を守るお方であることを知っていたからこそ、その約束を握って祈ったのである。
6. 祈りは、時として、罪の告白を伴う（ダニエル9章）
7. 祈りは、時として、祝福の祈りである
   レビ族の祭司がイスラエル民族全体のために祝福の祈りをする（Ⅱ歴代30：23～27）
8. イスラエル民族の中で責任ある地位につく指導者は、民族全体のために祈る責務を負う
   そのような例は、サムエル、ソロモン、そしてエズラ

9. 祈りには、時折、付随した行動が伴う。泣く、断食する、荒布を着る、灰をかぶる
10. 祈る時、人々は様々な姿勢をとっている。立つ、跪く（ひざまずく）、両手を上に伸ばす、エルサレムとその中にある神殿の方を向く、犠牲の動物を前にして祈る、寝室で壁の方を向く、など
11. ダニエルは1日のうちに3度、時間を決めて祈っていた
    特定の時刻を祈りの時間とするような定めは、ない。しかし、一日の中で、自分で時間を決めて祈る習慣をつけることは、神との交わりを通して祝福を受けるために必要
12. 祈りは、モーセの律法の中で義務付けられていない。また、あらかじめ書かれた式文のような祈りは、旧約聖書の中にひとつもない。祈りとは、自分が必要を覚え、その必要に応じる力を神が持っていると意識している人から、自然と沸き起こってくるものである。
13. 祈りは、時折、犠牲をささげながら祈られる。犠牲をささげないとしても、犠牲をささげる場所や時間と関連付けて祈ることもあった
14. 旧約聖書の中に記録された祈りには、大きくは5つの要素がある
    (1) 神による導き
    (2) 神による癒し
    (3) 神のさばきを免れる、あるいは止める
    (4) 神に自分の個人的な望みや必要を求める
    (5) 神に特別な状況のもとで守りを求める

前回は、48の祈りのうち、最初の10の祈りを学びました。本日は、続く10の祈りです。

□本日のアウトライン

11. ダビデ契約に関して
12. 神殿奉献に関して
13. 神が神殿を受け入れたことに関して（前の神殿奉献の祈りに対する神の応答）
14. ヤロブアムのさばきに関して
15. シュネムの女の息子に関して
16. エリシャのしもべに関して
17. エリシャの安全に関して
18. エルサレムのため、イザヤによる祈りに関して
19. エルサレムのため、ヒゼキヤによる祈りに関して
20. 癒しのため、ヒゼキヤの祈りに関して

旧約聖書の中の祈り【48の祈り】　②

11. ダビデ契約に関して

(1) 神がダビデと契約を結び、4つの永遠の事柄を約束した（Ⅰ歴17：10～14）

① 永遠の家、または王朝（12節）
② 永遠の王座（12節）
③ 永遠の王国（12節）
④ 永遠の子孫（14節）

Ⅱサム7：11～16・・・ダビデ契約の記事であるが、後継者ソロモンに焦点。彼の罪の問題とその対処も預言される。

(2) Ⅱサム7：18～29、特に27節

(3) このダビデの祈りは、神が自分と契約を結んでくださったことに感謝をささげる祈りである。

12. 神殿奉献に関して・・・Ⅰ列8：22～53　この祈りは、ソロモンが完成した神殿を神に奉献したときの祈りである。この箇所には、祈りに関する重要な教えがある。

(1) 神殿奉献　8：1～22

① 1～9節　契約の箱を運び上る
② 10～13節　主の栄光が宮に満ちた
③ 14～21節　王は振り向いてイスラエルの全集団を祝福して語った
④ 22節　王は（再び神殿の方に向き直り）祭壇の前に立ち、両手を天に差し伸ばした

(2) ソロモンの祈り　奉献　23～26節

① ソロモンの姿勢・・・彼の両腕は天に向けて伸ばされていた（22節）
② 祈りの基盤・・・・・ダビデ契約、ソロモンはその継承者

(3) ソロモンの祈り　7つの嘆願　27～53節　・・・27～29節はその序論で、ポイントは「この所に向かってささげる祈りを聞いてください」→ここから、ソロモンは顔を天ではなく神殿に向け、両腕を神殿に向けて伸ばした（参照38節）

① 30～32節　公正な裁き
② 33～34節　敵に打ち負かされたとき
③ 35～36節　干ばつのとき
④ 37～40節　災害のとき
⑤ 41～43節　異邦人に関して
⑥ 44～45節　戦いのとき
⑦ 46～53節　捕虜となったとき

ソロモンの姿勢・・・　祈りに入ったところで、ひざまずいた（参照54節）。両腕と訳されているヘブル語は「カフ」、くぼませた手の平を意味する。

(4) 「7つの嘆願」の祈りの中には、4つの特別な要素があった

① 祈りは、エルサレムの方に、特に神殿の方に向いて
② 両腕は神殿の方に向けて伸ばす
③ 嘆願の祈りである
④ 罪の告白を含む

13. 神が神殿を受け入れたことに関して
    (1) Ⅰ列9：3～9　特に3節
    (2) 前の神殿奉献の祈りに対する神の応答である
14. ヤロブアムのさばきに関して
    (1) Ⅰ列13：6　「神の人」とは、預言者を指す表現
    (2) ヤロブアムは神のさばきを受けて自分の過ちに気付き、無名の預言者に、自分のために祈ってくれるよう頼んだ。預言者が祈ると、彼の手は癒された。この祈りは、とりなしの祈りである。
15. シュネムの女の息子に関して
    (1) Ⅱ列4：32～37　特に33節
    (2) シュネムの女の息子が死んだ。彼女は、エリシャを訪ね、この事態を何とかしてほしいと頼んだ。
        ① そもそも、息子を授かったのは彼女から出た願いではなく、彼女がエリシャに親切にしたので、神が彼女に子を授けたのであった。それなのに、今、彼女から息子を取り去るとは、神のみこころがわからなくなったのである。
        ② エリシャは、その息子が生き返るように祈った。神はその祈りに答え、息子はよみがえった。
        ③ この祈りもまた、とりなしの祈りである。
16. エリシャのしもべに関して
    (1) Ⅱ列6：14～17　特に17節
    (2) エリシャのいた町が、夜のうちにアラム軍に包囲された。朝早く起きて外に出て、敵軍を見たエリシャのしもべは、恐怖に慄いていた。
        ① エリシャは祈った。しもべの目が開かれて次の光景を見ることができるように・・・エリシャとしもべがいる町ドタンは小さな山の上にある。アラム軍はふもとの平原を囲む周囲の山々に陣取って、町を包囲している。しかし、実は、ドタンの山複にはびっしりと、「火の馬と戦車」（詩68：17「神のいくさ車」＝天使たち）が町を取り巻いて、エリシャを守っている。
        ② この祈りは、シンプルな要求の祈りである。神がしもべの目を開かせてくださること、しもべの思考を教え導いてくださることである。
17. エリシャの安全に関して
    (1) Ⅱ列6：18～19　特に18節
    (2) アラム軍が陣取っていた山々から下って来て、エリシャを捕らえるために町に突入してきた。このとき、エリシャは祈った。
        ① 「この民を打って（アラムの民にさばきを下して）、盲目にしてください」
        ② この祈りもシンプルな要求の祈りである。エリシャの命が守られるようにという祈りである。

18. エルサレムのため、イザヤによる祈りに関して
   (1) Ⅱ列19：1～7　特に4節
   (2) アッシリヤ軍の脅威に直面し、イザヤはヒゼキヤ王の依頼を受けて、エルサレムのために祈った。
      ① その祈りに対する神の答えが、6～7節である。
      ② この祈りは、とりなしの祈りである。
19. エルサレムのため、ヒゼキヤによる祈りに関して
   (1) Ⅱ列19：14～20　特に、15節と20節
   (2) アッシリヤ軍の使者が来て、降伏を勧告する手紙が渡された。ヒゼキヤ王はその手紙を持って、神殿の丘を上り、神殿域に来た。そして神に祈った。
      ① アッシリヤの脅威に直面していること、周辺諸国も次々と滅ぼされたこと、アッシリヤ王の手から自分たちを救い、イスラエルの神、主だけが、地のすべての王国の神、生ける神であることを示してください。
      ② 神はヒゼキヤの祈りを聞かれ、介入された。その結果は、35～37節
      ③ この祈りは、単に自分たちの安全だけでなく、エルサレムのためのとりなしの祈りである。
20. 癒しのため、ヒゼキヤの祈りに関して
   (1) Ⅱ列20：1～7　特に、2節、5節
   (2) ヒゼキヤが重い病気にかかり、死に瀕した。彼は病床に横たわりながら、壁の方を向いて祈った。
      ① この姿勢は、病床のそばに来ているイザヤの存在から、ある程度プライバシーを保つ姿勢である。
      ② ヒゼキヤは祈りながら、大声で泣いた。
      ③ この祈りは、個人的な願い、病気から癒されるようにとの個人的な要求である。この祈りは聞かれ、神はヒゼキヤを癒した。
   (3) Ⅱ歴32：20～24によると、ヒゼキヤが病気になった原因は、高ぶりの罪であったように推察される。
      ① アッシリヤ軍を退けたことでヒゼキヤ王は周辺諸国から尊敬の目で見られるようになった（Ⅱ歴32：20～23）
      ② そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかったが、彼が主に祈ったところ、主は彼に答え、しるしを与えられた（24節）　しるし＝Ⅱ列20：8～11
      ③ ところが、ヒゼキヤは自分に与えられた恵みに応じて報いようとせず、かえってその心を高ぶらせ、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に、神の怒りが下ろうとした。このとき、ヒゼキヤがその心の高ぶりを捨ててへりくだり、彼及びエルサレムの住民もそうしたので、主の怒りはヒゼキヤの時代には彼らの上には臨まなかった（25～26節）